

所属学部：国際文化学部

学籍番号：17G0607

氏名：木村千夏

指導教員：鈴木靖

2020年度法政大学国際文化学部卒業論文

台湾の映画に登場する日本の描かれ方と親日感情への影響

目次

第一章 序論.....	2
第二章 作品のストーリーと作中に日本が表象されるシーン.....	4
第三章 映画の分類.....	12
第四章 日本の表象のされ方.....	14
第一節 ドキュメンタリー・歴史物.....	14
第二節 劇映画.....	15
第五章 台北発メトロシリーズ.....	21
第六章 映画作品から見える日本時代の記憶.....	23
第七章 まとめ.....	25
参考文献.....	27

第一章 序論

筆者が今回テーマを台湾の映画作品にするに至るまでには以下のような経緯がある。所属しているゼミで台湾の歴史について学んだ。学ぶまでの筆者の台湾に対する知識は、親日であることや、有名なグルメ、観光地くらいである。台湾について学び始めると、台湾は日清戦争後下関条約によって日本に割譲され日本がポツダム宣言を受諾し終戦するまでの1895年から1945年の間、日本が統治していたことを知る。統治している間には、日本人に反発する先住民や漢人が武装蜂起した事件も起こり、二大抗日事件とも言われる「タバニー事件」や「霧社事件」が今でも台湾の歴史を語るのに外せない。¹ゼミで台湾の歴史について学びながら、筆者は現在の台湾がなぜ親日であるのか、筆者自身が納得できる理由を探していた。

2019年11月13日に公益財団法人日本台湾交流協会が発表した対日世論調査で、およそ60%の回答が好きな国（地域）が日本であるという結果となっている。「日本に親しみを感じますか」という項目でも、約80%が親しみを感ずると答えている。「日本のどの分野に関心がありますか」という項目では、回答が多かったものから順に「観光」「食文化」「日本人の精神・哲学」「自然風土」「現代文化・ポップカルチャー」などがある。²この中で日本の「観光」「食文化」「自然風土」というのは日本に来なければ味わえないものである。このアンケート結果を見て、私は、台湾の人々が親日であることの理由として納得しきれずにいた。台湾の人々がここまで日本に親しみを感ずられることと、日本の統治時代とに関係があるのではないかと考えた。50年間も日本として存在していたのに、その記憶が全くなくなってしまうはずかないからである。今でも日本時代の名残が残っていて、台湾の人々にとって日本という国が身近な存在にあるのが当たり前で、わざわざ日本というものを意識することもなく、無意識的に日本に親しみを感ずっているのだと仮設する。

そこで、台湾の映画作品を見て、その作中に日本に関するものがどれくらい見つけられるか、それにはどのようなものがあるのかを見ていきたい。ここで映画作品を選んだ理由は、映画にはその国や地域の文化や特色が表れていると考えるからである。例えば、インド映画では歌って踊るミュージカル調の映画が多かったり、日本の映画では家族の食事シ

¹ 周婉窈(2013)「増補版 図説 台湾の歴史」p.105

² 公益財団法人 日本台湾交流協会「2018年度 対日世論調査」p8,p14

ーンで和食が並べられたりというようなものである。このようにして、台湾の当たり前になっている日常や風景に日本がどれくらい見られるかを見ていきたい。

台湾映画に関する研究には、赤松美和子・曾文莉（2017）、曾文莉（2018）、赤松美和子・曾文莉（2019）などの複数の映画作品あるいは映画監督の日本の表象に関する研究がある。これらは対象の映画や年代が異なることはあるが、日本の表象のされ方が多種多様であることや日本の表象の多元化は「日本」を特に意識することなく使われるようになったことの表れだとしている。³⁴また台湾のジェンダーの規範を示すものとして機能していると言った内容もある。⁵星野幸代（2010）、藤井省三（2012）、平岡敏夫（2013）、工藤貴正（2014）、小野純子（2016）などの1つの映画作品に絞った研究が蓄積している。作品としては『セデック・バレ』『海角7号』『KANO』『父の初七日』が取り上げられているが、まだ取り上げられていない映画作品も多い。

今回筆者が取り上げる台湾映画は、『湾生回家』『KANO~1931 海の向こうの甲子園~』『セデック・バレ(第1部、第2部)』『海角七号 君想う、国境の南』『あの頃、君を追いかけた』『藍色夏恋』『我的少女时代』『冬冬の夏休み』『西門に降る童話【台北発メトロシリーズ西門駅】』『この街に心揺れて【台北発メトロシリーズ大橋頭駅】』『振り向いたらそこに【台北メトロシリーズ忠孝復興駅】』『まごころを両手に【台北発メトロシリーズ新北投駅】』『隠し味は愛【台北発メトロシリーズ中正紀念堂駅】』『淡水河の奇跡【台北発メトロシリーズ淡水河駅】』『ハロー、グッドバイ。【台北発メトロシリーズ終点】』『南風』の計17本の映画である。中には既に研究対象にされた映画作品もあるが、それに加える形で新たな映画作品を見ていきたい。

³ 赤松美和子(2017)「1960年代の台湾映画における日本表象」

⁴ 曾文莉(2017)「2008年-2015年の台湾映画における日本の表象」

⁵ 赤松美和子(2019)「台湾学園映画が回顧する1990年代と日本大衆文化」

第二章 作品のストーリーと作中に日本が表象されるシーン

本稿でこのテーマについて論ずるにあたり、映画作品の中に見られる日本の表象を見ていくが、ドキュメンタリーや事実（日本にまつわること）を元にした映画に関しては、ストーリー時代に日本が関連していることによって、日本が表象されるシーンを見ていくのでは膨大な量になってしまうため、劇映画とは違う見方をすべきである。したがって、ドキュメンタリーである『湾生回家』や歴史上の事件をもとに作られた『セデック・バレ』、『KANO～1931 海の向こうの甲子園～』に関しては、この章の中では日本の表象されるシーンをまとめるのは省き、作品名、製作年、ストーリーのみとする。そして第四章で改めて触れたい。『あの頃、君を追いかけた』『藍色夏恋』『私の少女時代』『冬冬の夏休み』『西門に降る童話』『この街に心揺れて』『振り向いたらそこに』『まごころを両手に』『隠し味は愛』『淡水河の奇跡』『ハロー、グッドバイ。』『南風』は、作品名、製作年、ストーリー、作中で見られた日本が表象されているシーンをまとめる。

①湾生回家(2015年)

【監督】黄铭正（ホアン・ミンジェン）

【あらすじ】1895年から1945年台湾は日本統治下にあった。統治下の台湾で生まれ育った日本人のことを「湾生」と表現する。この映画には、6人の湾生がかつての故郷を訪れ、自分自信がそこに存在していた証を探していく。彼らは当時の思い出を生き生きと語る一方で、自らを“永遠の異邦人”と呼び、心の葛藤をあらわにする。この旅を通して、彼らの消化しきれていなかった葛藤が少しずつ解消していく。

②KANO～1931 海の向こうの甲子園～(2014年)

【監督】马志翔（マー・ジーシアン）

【あらすじ】時代は1931年。日本統治時代には、台湾からも甲子園に出場することができた。甲子園の出場を目指す台湾のチームが描かれている。嘉義農林学校野球部、「KANO」である。日本人の監督による熱い指導のもと、甲子園出場を果たし、伝説となる。当時は、日本人、原住民、漢人がごちゃ混ぜになって生活していたために、ぶつかり合いや様々な葛藤にぶつかる様子も描かれ、単なる野球映画ではない。実在した人物たちの実話を元にした感動作である。

③セデック・バレ 第1部：太陽旗(2011年)

【監督】魏徳聖 (ウェイ・ダーション)

【あらすじ】1895年、日清戦争で清が敗れると、日本の統治が始まる。統治は山奥にも広がり、平穏だった原住民族たちの生活は奪われていく。セデック族の一集落を統べる頭目の子、モーナ・ルーダオは村の内外に勇名を轟かせていた。

④セデック・バレ 第2部：虹の橋(2011年)

【監督】魏徳聖 (ウェイ・ダーション)

【あらすじ】運動会が開かれている学校を襲撃するセデック族。武装した決起部隊は、何も知らない多くの日本人を襲った。女子供の区別なく多くの人が命を奪われ、日本軍との戦いに展開する。

⑤海角七号 君想う、国境の南(2008年)

【監督】魏徳聖 (ウェイ・ダーション)

【あらすじ】台北でミュージシャンになるという夢を持った青年・阿嘉は、その夢が叶わない現実直面する。故郷である恒春に戻った阿嘉は、無為に日々を過ごしていた。郵便配達の仕事をするようになった彼は、宛先不明で未配達郵便物の中に、今では存在しない住所“海角7号”宛ての小包を見つける。その中には日本語で書かれた手紙が入っていた。再び音楽をする機会が訪れ、諦めていた夢にもう一度チャレンジしながら、その手紙の真相を探していく。

⑥あの頃、君を追いかけた(2011年)

【監督】ギデنز・コー

【あらすじ】台湾中西部の街、彰化が舞台。いつもおふざけばかりしているコートンは、同級生の仲間たちとバカなことばかりして、お気楽な高校生活を過ごしていた。後ろの席に座るクラス1の優等生・チアイーは、そんなコートンたちをあきれるように見ていた。ある日、コートンとチアイーはテストの点数で賭けをすることになり、放課後2人だけの勉強会が始まる。

【日本の表象】

- ・日本の文房具
- ・ちょうちょうをリコーダーで吹く
- ・卒業式で蛍の光を歌う

- ・ドラゴンボール
- ・ワンピース
- ・スラムダンク
- ・飯島愛
- ・大沢まどか
- ・大浦あゆみ

⑦藍色夏恋(2002年)

【監督】易智言（イー・チーイエン）

【あらすじ】17歳の夏。主人公のモン・クーロウは、親友のリン・ユエチェンと一緒に体育の授業をサボり親友のリン・ユエチェンが恋愛話の花を咲かせるシーンから始まる。モン・クーロウは、リン・ユエチェンにキューピット役を頼まれる。しかしリン・ユエチェンの好きな男子はキューピットであるモン・クーロウに恋をしてしまう。

【日本の表象】

- ・ノートに木村拓哉の名前を書く

⑧私の少女時代（2015年）

【監督】フランキー・チェン

【あらすじ】主人公の真心は、ちょっと地味な女子高生。真心の憧れの存在は、学校一番のイケメン男子・欧陽。欧陽は地味な真心には見向きもしない。一方で学校一の不良男子の太宇は、アイドル的存在の女子に恋をしていた。欧陽とアイドル的存在の女子が付き合っていると思ひ込んだ真心は、太宇と手を組んで2人を別れさせる作戦に乗り出した。

【日本の表象】

- ・SONYのラジオ
- ・ドラゴンボールの落書き
- ・「喜欢的人」「讨厌の人」
- ・内田有紀
- ・酒井法子
- ・「はい」
- ・Non-no（日本の雑誌）が書店に売られている
- ・「かわいい」

⑨冬冬の夏休み(1984年)

【監督】侯孝賢（ホウ・シャオシエン）

【あらすじ】1984年夏、冬冬は妹を連れて、夏休みの期間中祖父母の家に預けられることになった。祖父母の家に預けられている間、村の少年たちと仲良くなり毎日のように遊びまわっていた。母は病気を患って入院中で、母の心配をしながらも子供らしく楽しい夏休みを過ごす。ある日事件が起こる。ひと夏で子供ながらに成長する男の子を描いた映画。

【日本の表象】

- ・冒頭の卒業式のシーンで「仰げば尊し」が歌われる
- ・友人のセリフ「日本のディズニーランドに行く」
- ・祖父母の日本式の住宅（畳）
- ・道の脇に祠がある
- ・ドラえものの漫画
- ・おじいさんの持っているアルバムの写真の脇に「昭和〇年」と書いてある（画質の問題で年数はわからなかった）
- ・赤とんぼが作中に流れる

⑩西門に降る童話【台北発メトロシリーズ西門駅】（2015年）

【監督】葉天倫（イエ・ティエンルン）

【あらすじ】小虎は露店でファッションコーディネーターとして働いている。小虎は母と二人暮らしをしていて、ギクシャクしていた。付き合っていた恋人にも二股をかけられ、さみしい思いをしていた。そんなある日空からお札が降ってくる現場に遭遇し、空を仰ぎ叫ぶ不思議なホームレスのキングに興味を持つ。不思議と惹かれる謎の多い彼に興味を抱いた小虎は、2人で過ごすようになる。

【日本の表象】

- ・主人公がお店でお客さんに対して「ありがとう」という日本語を話す

⑪この街に心揺れて【台北発メトロシリーズ大橋頭駅】（2015年）

【監督】林君陽（リン・ジュンヤン）

【あらすじ】アメリカで暮らす数学者ジョンシオンと日本で暮らすジンフェイは、お見合いをするためにそれぞれ台湾に帰国していた。ある日ジョンシオンはお見合い相手との集会所で出会ったジンフェイを相手と勘違いしてしまうところから2人の関係は始まる。

さらにジョンシオンはジンフェイの実家の旅館に宿泊していた。不思議な縁で結ばれた2人は次第に惹かれ合うが、それぞれ住む環境が違うことでお互いに本心を伝えられないままジョンシオンがアメリカに帰国する日が迫る。

【日本の表象】

- ・主人公の女性「日本と地下鉄が好きで運転は嫌い」
- ・ヤマハのピアノ（お店）
- ・日本人の友人との会話で日本語が話される。
- ・「お願いします」「どこ行くの?」「どうぞ」「じゃあね」
- ・主人公は日本（東京）に住んでいる（お見合いのために台湾に帰国）
- ・街中に「からすみ日本饼干」というお店
 - ・日本の居酒屋風のお店で日本酒のようなもの（徳利とおちょこ）を飲んでいる（お会計では日本のカードを間違えて出してしまう）
- ・ひとり酒が日本の習慣と捉えている（主人公と母との会話）
- ・主人公はYahoo!を使い日本語で何かを検索している

⑫振り向いたらそこに【台北メトロシリーズ忠孝復興駅】（2016年）

【監督】北村豊晴

【あらすじ】複数のアルバイトで生計を立てている湘海は、カメラマンの仕事で訪れた結婚式場で小嫻に一目惚れをする。冴えない上に清潔感もない湘海に小嫻は全く見向きもせずに避けていた。湘海はおコーヒーをこよなく愛していて、ある日小嫻へコーヒーを飲ませると急展開。湘海に積極的にアプローチされ、湘海が淹れるコーヒーに癒され次第に惹かれて行く小嫻。そんなある日小嫻のお腹に湘海の子が宿っていると分かる。

【日本の表象】

- ・部屋の中にドラえもののステッカーがある
- ・コーヒーを飲んだ後に日本の着物（袴）を着ているイメージシーンが流れる
- ・Flumpoolの証が主題歌？挿入歌？で使われている
- ・壁ドンの練習をしている
- ・日本のエロ雑誌がある
- ・あやとりをしている
- ・「男気 注入します！」と書かれた物が部屋に置いてある
- ・赤ちゃんのお尻拭きシートのCM撮影で日本の袴姿
- ・「良い匂い」というセリフ

- ・妊娠したことを聞いて切腹するイメージシーンが流れる
- ・友人のセリフ「イチローのように猛打賞だな」

⑬まごころを両手に【台北発メトロシリーズ新北投駅】(2016年)

【監督】林孝謙(リン・シャオチェン)

【あらすじ】海外留学したいと思っていたファンルーだったが、祖母の老舗の温泉旅館が経営難になり夢を断念しなければならなくなった。ファンルーは引きこもり生活をしていて、祖母の旅館の立て直し作戦を開始する。旅館に現れた外国人が旅館の一員に加わりながら日々営業していた。そんなある日、祖母の所有しているバイオリンを見つける。このバイオリンは、実は国際的に有名な日本人バイオリニストが恋仲になった祖母へ残した思い出のバイオリンだった。

【日本の表象】

- ・ストーリーに日本が関係している。
- ・日本風の旅館(建物)
- ・日本人客(山田智生)
- ・日本語で接客
- ・旅館内に日本語のポストカードがある。
- ・旅館内に神輿がある。
- ・北投は温泉で有名な場所(統治時代の名残)

⑭隠し味は愛【台北発メトロシリーズ中正紀念堂駅】(2016年)

【監督】葉天倫(イエ・ティエンルン)

【あらすじ】主人公のチェンチーは、海外を飛び回るピアニストと結婚している。夫は仕事で忙しく、チェンチーは1人寂しく台北で暮らしていた。チェンチーの寂しさを少しでも紛らわすために料理教室を始めることを夫から勧められチェンチーは料理教室を開いていた。ある日、料理教室に入会したいという既婚男性が現れ、2人は次第に心惹かれていく。2人にはそれぞれ愛する人がいて、複雑な心情のまま2人はどうするのか。

【日本の表象】

特になし

⑮淡水河の奇跡【台北発メトロシリーズ淡水河駅】(2016年)

【監督】高炳權(ガオ・ピンチュアン)

【あらすじ】多額の借金を背負ったシーカイはある日淡水河で溺れている青年を救助する。青年にはいくつか不可解なことがあり、ひとまず家に連れて帰ると青年を見た母親は20年前に失踪した夫に瓜二つだと言う。青年も過去から未来へタイムスリップしたシーカイの父親だと主張し、家族やその友人を混乱させる。初めは信じていなかったシーカイだが、父だと証明できる出来事があり、そこから20年の時を経て家族が一丸となって困難に立ち向かう。家族の思いに奇跡は起こるのか。

【日本の表象】

特になし

⑩ハロー、グッドバイ。【台北発メトロシリーズ終点】(2016年)

【監督】李青蓉(リー・チンロン)

【あらすじ】絵を描くことが好きなシアオジェーは、北投駅のホームでいつも見かけるシアオガンに恋をしていた。ある日シアオジェーの家に郵便が届くが、届けに来た配達員がなんとシアオガンだった。その日をきっかけで話すようになった2人は互いに寂しい境遇にあると言う共通点から、距離を縮め、付き合うようになる。自分の絵を出版したいと言う夢を叶えるため、メトロで行き交う人々を描くことにしたシアオジェーを応援するシアオガン。ところがある日シアオガンは突然姿を消してしまう。

【日本の表象】

- ・日本の漫画が置いてあるカフェの一室のような部屋
- ・日本人観光客が道を尋ねてくる
- ・燃えよドラゴンのポスター

⑪南風(2014年)

【監督】萩生田宏治

【あらすじ】恋人に浮気され、仕事では自分のやりたい仕事ができず異動になってしまった風間藍子は、台湾に取材に訪れる。サイクリングに関する取材のため自転車を借りようとした店でトントンと名乗る少女と出会い、共に取材の旅に出ることになる。旅の途中で出会う青年ユウや、インタビューをする日本人の植村豪との出会いもあり、自転車の旅を通して心を通わせていく。

【日本の表象】

- ・書店に並ぶ日本のファッション雑誌
- ・トントンの携帯電話の着メロが演歌
- ・お店の看板に「の」の文字
- ・日本統治時代に作られた鉄橋「龍騰断橋」

第三章 映画の分類

第二章一節でも触れたが、これらの映画作品はまず3つに分けられる。1つはドキュメンタリーである。『湾生回家』は日本統治時代に台湾で生まれ育った日本人の現在を追ったドキュメンタリー映画である。監督は台湾人であるが、日本人スタッフも製作に携わっている。映画内ではもちろん日本語も話される。2つ目は、歴史上の事件や事実をもとに作られた映画作品だ。ここに分類されるのは『セデック・バレ』と『KANO～1931 海の向こうの甲子園～』の2作品だ。『セデック・バレ』は第48回台湾金馬獎にて最多11部門にノミネート、見事グランプリを受賞した。観客賞にも選ばれたほか、助演男優賞、オリジナル音楽賞、音響効果賞、最優秀台湾映画人賞を獲得した。2011年ヴェネチア国際映画祭のワールドプレミア上映では世界の映画人たちから注目を集め、アカデミー外国語映画賞台湾代表作品にも選出された。⁶『KANO～1931 海の向こうの甲子園』は、世界でも歴史ある映画賞の1つである第51回金馬獎では、最優秀作品賞、主演男優賞（永瀬正敏）、新人賞曹佑寧）、新人監督賞（馬志翔）、衣裳デザイン賞、オリジナル楽曲賞、の主要6部門にノミネートされ、観客賞と国際映画批評家連盟賞の2つの賞を受賞した。⁷この2つの映画はどちらも魏徳聖監督が製作した映画である。同じ監督が製作した映画ということもあり、日本統治時代が描かれている点で共通している。これらの映画において日本がどのように表象されているかは、次の章でまとめる。これらの映画は獲得した賞の多さからも多くの人々に注目されていることがわかる上に、特に台湾の人々にとって過去を知るための大事な映画になっているのだろう。

3つ目は、ドキュメンタリーと歴史上の事件や事実をもとにした映画作品以外の、劇映画ということになる。先にあげた『湾生回家』『セデック・バレ』『KANO～1931 海の向こうの甲子園～』以外の映画作品ということになるが、ここでまず『海角七号 君想う、国境の南』について触れておきたい。この映画は、『セデック・バレ』『KANO～1931 海の向こうの甲子園～』の監督である魏徳聖監督が製作した作品である。この作品は、日本統治時代のことをメインテーマとして扱っているわけではないが、現代と統治時代の両方をストーリーに組み込んでいる。また現代の部分でも、主人公の女性は日本人で、日本から台湾へ仕事をしにきているという設定だ。台湾や中国で批判の声も上がる中、台湾金馬

⁶ U-PICC 映画『セデック・バレ』公式サイト 一部引用

⁷ 小野純子(2016)「台湾映画『KANO』の語り」

奨に各部門でノミネートされ、作品賞、主題歌賞、助演男優賞などとともに観客賞も受賞した。⁸この映画は、日本の統治時代も内容に含まれているため分類が難しい。この後の劇映画としての扱いの中ではこの作品は除いて見ていきたい。『南風』については、日台合作映画で、ストーリーにも日本が関連しており、作品の中でも日本語が話されたり日本での場面もあったりする。製作自体に日本が関わっているということもあり、この後の章で出てくる劇映画の分類からは外しておきたい。『あの頃、君を追いかけた』『藍色夏恋』『私の少女時代』はいずれも学生時代を舞台とした淡い青春を描く映画だ。これらの人気は台湾にとどまらず、日本でも評価の高い台湾映画として知られている。『あの頃、君を追いかけた』、『私の少女時代』はいずれも現代から始まり 1990 年代の高校時代を回顧する学園映画である。これらの映画には、1990 年代の台湾が再現されており、断片として当時の台湾で受け入れられていた日本大衆文化も現れる。⁹『藍色夏恋』は 2002 年に公開された台湾・フランス合作映画だ。¹⁰主人公が恋するのは同性の友人であるという展開がとても新しい映画となった。『冬冬の夏休み』は小学生といた年頃の冬冬が夏休みに祖父母の家に遊びに行く話である。『西門に降る童話』『この街に心揺れて』『振り向いたらそこに』『まごころを両手に』『隠し味は愛』『淡水河の奇跡』『ハロー、グッドバイ。』は『台北発メトロシリーズ』というシリーズ作品である。様々な恋愛模様が描かれる映画だ。これについては第五章で触れたい。

⁸ 星野幸代(2010)「台湾映画『海角七号』における日本：「野ばら」をめぐって

⁹ 赤松美和子(2019)「台湾学園映画が回顧する 1990 年代と日本大衆文化」

¹⁰ 赤松美和子(2019)「台湾学園映画が回顧する 1990 年代と日本大衆文化」

第四章 日本の表象のされ方

第一節 ドキュメンタリー・歴史物

ここでは、第三章でも触れているが、ドキュメンタリー映画である『湾生回家』『セデック・バレ』『KANO~1931 海の向こうの甲子園~』についてまとめておく。

まず『湾生回家』は、統治時代に台湾で生まれ育った日本人の現在を撮った作品で、それぞれの登場人物はかつての故郷台湾を訪れ思い出を思い返し、知人を探したり母の過去を探したりする様子が見られる。映画のなかで彼らは今でも自分たちの故郷はどこなのか、自分たちは日本人なのか、台湾人なのか、という葛藤が胸の中に残っていて、自らを『異邦人』と呼んでいる。このドキュメンタリーを見れば、日本が統治していた時代と、その時代に巻き込まれた人々がどのように生きてきたのか、何を抱えて生きてきたのかを考えるきっかけになる。日本人であれば見るべき映画である。ここでは日本が統治していた過去が正解だったのか間違いだったのかというような表現はなく、ただ事実として語られている。これを見る台湾人の中にも、登場人物と同じ葛藤を抱く人がいるかもしれない。

『セデック・バレ』は、統治下に起きたセデック族による抗日事件を描いた映画である。この映画に関する評価について、曾は以下のようにまとめている。

『セデック・バレ』が台湾で上映された当時、この映画は一体反日なのか親日なのか、一時的に話題になった。台湾は歴史的な背景によりアイデンティティの問題があるので、大きく異なる観点が出てくることは予想できる。面白いことに、映画を見た中国人の感想を聞くと、これは親日だという人が多い。日本人を美化し過ぎている、セデックは民族精神がないなどの評価がよく見られる。日本人の感想を聞くと、反日だと思える人が比較的多い。特に登場する日本人巡査はステレオタイプの嫌な日本人にすぎない。役の悪人ぶりが誇張ではないかという感想がある。¹¹

¹¹ 曾文莉（2017）「2008年—2015年の台湾映画における日本の表象」

筆者自身は、この映画における日本の表象のされ方について、反日の色があるとは感じなかった。当時の日本の山地警察や軍の対応としてそのような理不尽さがあるということは十分にありえるからである。また、評価が賛否両論あるのには、それほど多くの人々の関心が集まっているということであるので、日本に関するものに関心が強いことの表れであると言えるだろう。

『KANO~1931 海の向こうの甲子園』での表象のされ方は、多種多様であった。良いイメージとして日本が表象されるシーンでは、甲子園に導く監督と生徒たちの絆が描かれる場面や、八田與一を「八田先生」と呼ぶシーンだ。これらのシーンでは、日本人によって甲子園に出場できた、また日本人によって水道が通り生活が豊かになったことが描かれ、日本人の存在が良い形で描かれている。その反対に、悪いイメージとして日本が表象されるシーンでは、甲子園で伝説となるような結果を残した彼らに日本人の報道陣が囲むシーンで、とある日本人が彼らの中に「どうして日本人と台湾人が同じチームでやっているんですかね？」という差別的な質問を投げかける。ここでチームの監督が「民族なんて関係ないでしょう。みんなただ一緒に野球をやる球児というだけだ。」と言い返すシーンがあるが、当時差別的な思考を持つ日本人も確かにいたことがわかる。第三章で、『セデック・バレ』と『KANO~1931 海の向こうの甲子園~』の監督が同じ監督であることは述べたが、良いことも悪いことも、事実としてそのままに伝えていることがわかる。

第二節 劇映画

『あの頃、君を追いかけた』『藍色夏恋』『私の少女時代』『冬冬の夏休み』『西門に降る童話』『この街に心揺れて』『振り向いたらそこに』『まごころを両手に』『隠し味は愛』『淡水河の奇跡』『ハロー、グッドバイ。』の映画を見て作中に登場した日本の表象を種類別にまとめた（表1）。

①日本語

「ありがとう」は日本語の中で一番よく知られている言葉であるが、これが『西門に降る童話』で登場した。ストーリーに日本は関係していない。主人公が露店でファッションコーディネーターをしていて、そこに訪れたお客様に「ありがとう」と話すのだが、このシーンを見てその客が日本人であるかどうかはわからないため、日本人に対して話してい

〔表1〕台湾の劇映画に見られる日本の表象

分類	日本の表象
日本語	「ありがとう」「お願いします」「どこ行くの?」「どうぞ」「じゃあね」 「昭和〇年」「の」「はい」「かわいい」「いい匂い」、「まごころを両手に」の 主人公の祖母が日本語で話す
音楽	蝶々, 蛍の光, 仰げば尊し, 赤とんぼ, 証/flumpool (「振り向いたらそこに」主題歌)
漫画	ドラゴンボール, ワンピース, スラムダンク, ドラえもん
人物	飯島愛, 小沢まどか, 大浦あんな, 木村拓哉, 内田有紀, 酒井法子, イチロー
場所	ディズニーランド, 漫画カフェ
物	畳 (日本式建物), SONY のラジオ, non-no, エロ雑誌, 日本の文房具, 燃えよドラゴンの ポスター, YAMAHA のピアノ, 日本語のポストカード
文化	壁ドン, あやとり, 漫画, 着物姿, 切腹

る可能性もあるが、そうでない可能性も十分にあり得る。日本人が「サンキュー」と話すのと同じ感覚で使われていると考えてもおかしくないだろう。

『この街に心揺れて』は、ストーリー自体に日本はあまり関係ないが、主人公は台湾人だが日本に住んでいる設定なので、台湾にいても日本人の友人と話すシーンがありそこで「お願いします」「どこ行くの?」「どうぞ」「じゃあね」といった簡単な日本語を話している。『冬冬の夏休み』もストーリーに日本は関係ない。主人公の冬冬が夏休みに祖父母の家に預けられるストーリーだが、そこで冬冬は祖父に昔のアルバムを見せてもらうというシーンがある。そこでアルバムに貼ってある写真の脇に「昭和〇年 (画質が鮮明でなかったため年数はわからなかった)」と記載されていた。ここから考えられるのは、祖父は日本の統治時代を経験していて、その頃台湾では日本語も使われており、日本の元号が使われていたということが推測できる。

『私の少女時代』では、主人公が授業中に自分のノートに落書きをしているシーンがあるが、そこで書かれている内容に「喜欢的人」「討厭の人」という文字が見える。これは日本語で「好きな人」「嫌いな人」という意味になるが、ここで本来中国語 (台湾語) で書くとすれば「喜歡的人」「討厭的人」となるはずだが、「的」が日本語の「の」に書き換えられているのだ。これはこの映画の舞台でもある 1990 年代の若者の間で流行していたと考えられ、日本語の「の」という文字が持つ意味が台湾の人々にもきちんと理解されて使われていることがわかった。また『南風』でも映り込んだお店の看板に「の」が使われていた。筆者も台湾を訪れた際街中で実際に「の」が使われているのを見たことがある

ので同じ発見ができたシーンであった。『私の少女時代』の別のシーンで、リン・チェンシンが好意を寄せているシュー・タイユーに好きなタイプについて聞いた時、その男子は日本の女性の名前をあげる。その時の会話の流れで「はい」と日本語をわざと口にする。また、主人公が可愛くイメチェンをする展開の後、「かわいい」と話すシーンもある。これらのシーンで有名な日本人が台湾人にも認知されていて、また簡単な日本語を知っていることが見てわかった。

『振り向いたらそこに』という映画は、監督が北村豊晴という日本人の監督である。彼は台湾で活躍する映画監督、俳優であるため、この映画には日本に関するものが度々登場する。主人公のヒロインの恋をした男が仕事でCM撮影をするシーンがある。そこでお尻ふきのCMでいい香りであることを「いい匂い」という日本語のセリフで宣伝するという構成になっている。しかも衣装は袴姿で、この映画は終始コミカルに描かれているためそこで日本が登場することにあまり深い意味は取れないが、台湾で上映するのが前提の映画に、日本語や日本式の衣装を採用するには、見る側がそれを受け入れてくれることがわかっているからだと考えれば、台湾の人々が日本に対して心を開いていると考えられる。

『まごころを両手に』は、ストーリーに少し日本が関係している。主人公の祖母が若い頃は日本の統治時代であったことから、その頃から経営していた温泉旅館では日本人客も訪れていた。そこで出会った1人の日本人男性と恋仲になった祖母は日本語が話せた。作品の中で祖母の若かりし頃の回想シーンでは日本語で話していたり、歳をとった後も未だに日本語を話すシーンがある。この映画では、劇映画であるが日本の統治時代の様子が描かれ、その当時は台湾人と日本人はごく普通に共に生活していた様子がわかる。また台湾人と日本人であっても恋愛もできていたことがわかった。

②音楽

『あの頃、君を追いかけた』でチアイーの家に行くクラスメイトが、チアイーの部屋である2階の窓に石をぶつけてチアイーを気づかせてチアイーが窓を開けて見下ろすと、クラスメイトがリコーダーでちょうちょうを吹いているシーンがある。この映画が台湾の映画であることを改めて思い出すと、このメロディーが日本の「ちょうちょう」であることにハッとするだろう。リコーダーで吹いている、ということから小学校でリコーダーを習う際に吹いていたのではないかと推測でき、日本の民謡が台湾人の人々の中でも同じように残っているように思える。『あの頃、君を追いかけた』の卒業式でのシーンで、「蛍の光」が歌われている。

『冬冬の夏休み』の冒頭でも卒業式のシーンがあるがそこで歌われているのは「揚げば尊し」であった。さらに作品の中で夕焼けを写しながら「赤とんぼ」が流れるシーンもあり、「ちょうちょう」と同様、昔から行事ごとで歌われる歌などは統治時代の名残で現在でも台湾でもしばしば使われていることがわかった。これには日本が色濃く表れていると感じた。

日本の音楽が使われているという点で一番筆者が驚いたのは『振り向いたらそこに』であった。この作品は前述した通り日本人の監督の作品であるが、この作品の主題歌と挿入歌に、日本のアーティスト「flumpool」の曲である「証」が使われている。中国語版でも、台湾語版でもなく、日本語のオリジナル音源がそのまま使われているのだ。これを見知らずに見た日本人はきっと驚くであろう。

③漫画

世界的にも有名な日本の映画は、台湾でももちろん当たり前のよう知られている。それが言えるのも、各映画の中に高確率で登場するからだ。特に、学生時代を描く『あの頃、君を追いかけた』『私の少女時代』にはドラゴンボールやワンピース、スラムダンクなどが登場し、小学生くらいの年頃を描く『冬冬の夏休み』でもドラえもんが登場する。これらの漫画の登場の仕方としては、登場人物が読んでいたり、部屋の中に無造作に置かれていたり、日本でも見られる状況とまったく同じなのだ。日本のアニメ漫画の文化は、世界的にも有名であるが、台湾にも同じように人々の日常に溶け込んでいることがわかる。

④人物

日本の人物もまた台湾の映画に登場していた。『あの頃、君を追いかけた』では主人公のコートンが大学に進学し、寮で出会ったルームメイトとの会話で『飯島愛は年取った、小沢まどかはわりといい感じ、大浦あんなもいい』というような会話が展開する。これには、赤松もこのようにまとめている。

台湾にアダルトビデオが流入したのは、1970年代のことだ。当時はヨーロッパと香港のものが多数派であり、「小電影」や「黄色電影」などと呼ばれ映画館などで上映されていたという。その後、1980年代に入り、アメリカや日本からビデオの形式で輸入され、現在の呼称に通じる「A片」と呼ばれる。レンタルに加えて夜市などでも販売されたことで、家庭やMTVなどでも視聴可能

となった。1990年代は、日本アダルトビデオの全盛期で、レンタルビデオやVCD以外にも専門テレビチャンネルなどメディアも多岐にわたり、「日本AV女優」「飯島愛」といった言葉が流行語になったほどだ。2000年代には、日本や欧米のアダルトDVDが販売されたほか、個人でインターネットを利用して動画を視聴したりダウンロードしたりすることも可能となり、台湾人自身の自撮りや盗撮動画も動画サイトに掲載され始める。

このように1990年代は、「日本AV女優」「飯島愛」が流行語にはなったほど日本のアダルトビデオの全盛だった。2000年代以降、「日本AV女優」「飯島愛」は、映画にまで描かれる対象となっていく。¹²

『私の少女時代』も、主人公のリン・チェンシンがシュー・タイユーに好きなタイプを聞くシーンがある。そこでシュー・タイユーは「酒井法子」と「内田有紀」の名前をあげている。『藍色夏恋』では、モン・クーロウが恋愛対象を友人のリン・ユエチェンではない別の人に変えようとしてノートいっぱい「木村拓哉」と書き綴るシーンがある。これらの作品の中で登場した日本人の人物たちは、『あの頃、君を追いかけた』ではアダルトビデオに関する話題で上がったものではあるが、特に酒井法子や内田有紀、木村拓哉はそれぞれ誰もが知っていて憧れの存在的な扱いで登場していることがわかる。1990年代には、日本の芸能人に憧れを抱く若者が多くいたことが表されていると考えられる。また、『振り向いたらそこに』では「イチローのように猛打賞だな」というセリフがあり、友人へのツッコミとして使われているのだが、ここでも誰もが知っている人物でなければ会話が成立しない。イチローは世界的にも有名なものでそれには納得であるが、やはり日常的に日本人の人物が会話の中で話されることが珍しくないというのがわかった。

⑤場所

『冬冬の夏休み』で、冬冬が祖父母の家に向かうのに列車に乗ろうとすると、向かいのホームに友人が立っており、その友人とホーム越しに話すシーンがある。そこで冬冬が友人に「どこに行くの?」と話すと、友人は「日本のディズニーランドに行くんだ」と答える。

⑥物

¹² 赤松美和子(2019)「台湾学園映画が回顧する1990年代と日本大衆文化」

日本のものが写り込むことも多かった。漫画は先にとりあげたので細かくは触れないが、SONY のラジカセ、YAMAHA のピアノ、畳（日本式建物）、non-no、エロ雑誌、日本の文房具、燃えよドラゴンのポスター、YAMAHA のピアノ、日本語のポストカードなど、筆者が見落としているものもまだまだあるかもしれない。SONY や YAMAHA は有名なメーカーで台湾でも普及していることがわかる。YAMAHA に関しては筆者が台湾に訪れた時も各地にバイクを取り扱う店舗があったことを思い出した。台湾にはとても馴染みのあるものなのだろう。日本式の建物に関しては、『まごころを両手に』の主人公の祖母が経営している温泉旅館自体の作りが日本式であった。また、『冬冬の夏休み』で冬冬が夏休みを過ごした祖父母の家も日本式で、畳のある和室だった。特に冬冬の夏休みからは、台湾の人々の生活様式に日本式が取り入れられていることがわかり、これは統治時代の名残であると言えるだろう。

⑦文化

『振り向いたらそこに』では日本の若者の間で流行していた「壁ドン」を練習するというシーンがある。この映画の監督が日本人であるということから、この監督がここまで日本の文化や音楽を取り入れるのには、台湾の人々に日本の流行などを知ってもらいたいという思いを感じた。また同作品であやとりをしているシーン、着物姿に髪も結っているシーン、切腹をするシーン（実際にはしない）もある。この映画に関しては、台湾に浸透している日本の文化というよりも、台湾の人々に対して日本の文化を紹介するような役割があるのだと捉えられる。

第五章 台北発メトロシリーズ

ここでは、先行研究では論じられていなかった『台北発メトロシリーズ』についてとりあげたい。『台北発メトロシリーズ』というのはイエ・ティエンルー監督がプロデュースする、台北地下鉄の7つの駅を舞台に、6人の気鋭の監督が描く人と人との縁がテーマの劇場3作品である。¹³これらの作品は、ストーリーはそれぞれであるが、『ハロー、グッドバイ。』の主人公となる男女が、それぞれの作品の登場人物を引き合わせるなど、キューピット的な存在になっており、全ての作品に登場する。また台北という一つの街を舞台にしていることもあって、所々で別の作品の登場人物が登場することもある。しかし、監督は皆同じ人というわけではないので、その映画ごとに雰囲気が異なる。シリーズであることから7作品すべてを取り上げたが、『隠し味は愛』と『淡水側の奇跡』には日本に関するものは見られなかった。しかし『まごころを両手に』『この街に心揺れて』『振り向いたらそこに』に関しては、日本がメインのストーリーではないものの日本の統治時代や日本語、音楽など文化が盛り込まれている作品であったため、今回の研究の対象にするにはとても良いシリーズであったと思う。

『まごころを両手に』で舞台となる台湾の北投という地域は、実際にも台湾最大の温泉郷として有名な地域で、片倉「古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年 1895-1945」で次のように書かれている。

北投は台湾最大の温泉郷で、台北の奥座敷とも称された土地である。温泉豊富なことで名を馳せたが、古くは硫黄の採掘で知られていた。温泉が発見されたのは1893年のこと。ドイツ籍の硫黄商人オーリーによるものとされている。その後、1896（明治29）年の春、大阪出身の平田源吾によって天狗庵が開かれ、これが温泉街の端緒となった。

台北州立公共浴場を筆頭に、浴場は北投公園を囲むように点在していた。旅館は数十軒に達しており、そのほかに銭湯や保養所、別荘があった。四季を問わず、浴客が絶えることはなかったという。¹⁴

¹³ シネ・ヌーヴォ X 「【台湾巨匠傑作選】〈台北発 メトロシリーズ〉」一部引用

¹⁴ 片倉圭史(2015)「古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年 1895-1945」p.64

『まごころを両手に』に関しては、舞台となる北投自体が統治時代の名残がそのままに残っている地域なので、この映画自体が日本との関係が強い。『ハロー、グッドバイ。』では主人公が画家になるという夢を持っていて、日本の漫画が置いてある個室になっているカフェのようなところに行くシーンがある。ここからわかることは、漫画が有名だけでなく、日本の漫画が1人の女の子の夢に少なからず影響していることだ。つまり、漫画という文化が、いい影響をもたらすものとして捉えられているのである。

第六章 映画作品から見える日本時代の記憶

筆者は、台湾の親日感情には、日本統治時代の集合的記憶が関係していると考え。これまでに見てきた映画作品の中で出てきた日本の表象の中にはポップカルチャーや日本語、日本のメーカーの商品といったものもあったが、こうした表層的な表象の他に、日本統治時代の集合的記憶として表象される点をここで取り上げたい。

まずは人物である。『KANO～1931 海の向こうの甲子園～』に登場する、嘉義農林学校（嘉農）野球部の監督である近藤兵太郎。彼は日本人だが、弱小だったチームを甲子園へ導き、その後も監督を続け甲子園には5回出場へ導いたという。彼の存在はこの学校ではとても大きな存在であることだろう。また、甲子園出場は台湾全体を見ても注目される出来事であると考えられるため、多くの台湾人に知られた日本人になったはずだ。また、同作品で登場する八田與一も台湾で有名な日本人の1人である。嘉南大圳建設に取り組み、烏山頭ダムを建設した日本人として知られる。映画内でも、プロジェクトに打ち込む彼を学生たちが声を揃えて「八田先生」と呼ぶ様子が見られる。日本統治時代、台湾の発展に誠実に寄与した「よき日本人」の表象としての八田は、多くの台湾人の記憶に今でも残っているだろう。

次に音楽である。『冬冬の夏休み』で流れる「仰げば尊し」と「赤とんぼ」である。これは、日本統治時代に歌われていたものの名残だと考えられる。『あの頃、君を追いかけた』の卒業式のシーンで歌われる「蛍の光」は、明治時代にスコットランドの民謡「オールド・ラング・サイン（Auld Lang Syne）」に日本語の歌詞をつけて小学校唱歌にしたものだが、これも日本統治時代の学校教育あるいは少年時代の記憶を表象するものであろう。『冬冬の夏休み』は1984年に製作された映画で、『あの頃、君を追いかけた』は2011年に製作された映画なので、現在でも歌われていることがわかる。

その他として、日本式の家屋（建物）、統治時代に作られた建造物、日本時代に馴染みの深い地域も、日本統治時代の記憶として残っているものにあげられるだろう。日本式の家屋が登場したのは『冬冬の夏休み』で、畳が敷かれている部屋があった。映画の登場人物も日本人ではなく台湾人であった。『まごころを両手に』では温泉旅館が舞台であるが、旅館の造りが日本式で、和室（畳、障子）であった。ここは観光地として日本風の建物を残している意図がありそうだが、台湾の人々に日本統治時代のノスタルジーを感じさせる場ともなっている。また建造物としては、『KANO～1931 海の向こうの甲子園～』で八田與一によって作られた烏山頭ダムと『南風』で登場する龍騰断橋がある。『南風』

の中では登場人物のユウが「日本人が作った」というセリフがあり、それに対してトントンが「1935年と1999年の地震で壊れた」と付け加える。日台合作映画であるため意識的に日本統治時代に作られたものを登場させた意図があるのかもしれないが、これらの建造物は実際に今でも台湾に残っている。日本統治時代を表象する地域としては『まごころを両手に』の舞台となっている北投という温泉地もある。こちらも日本統治時代に温泉地として完成したものである。

本稿で取り上げた映画作品の中には、日本統治時代の記憶が表象されていると考えられる場面が多く出てきた。これらは台湾の人々にとって、普段の生活では意識して考えることはなくとも、社会に伝わる集合的記憶として存在しているものなのではないだろうか。そしてその存在があるからこそ、日本に対する親しみの感情が生まれるのではないだろうか。

第七章 まとめ

これまで、台湾の映画作品を見て、作中で見つけた日本に関するものにはどのようなものがあったかをまとめた。その結果、多くのものは、映画のストーリーに関係なく登場していた。それは、学生時代に誰もが一度は読んだこのある漫画や、その時流行し多くの人々の憧れの存在であるのがわかった。曾文莉（2017）では、今の台湾映画に登場する日本の表象は多様化しただけでなく、一般大衆にとって、昔より「日本」を意識させないこともわかる。¹⁵と述べられている。この論文での「今の台湾映画」というのは2008年から2015年の映画のことを指しているため、「昔」というとそれ以前のことになる。本稿では、『冬冬の夏休み』が1984年の映画なので昔の映画ということになる。この映画を見る限りは、日本が表象されるシーンも多いが、そこから日本を意識して使っているようには感じられなかった。当たり前のように冬冬がドラえものの漫画を読んでいたり、夕暮れ時の空を映しながら赤とんぼを流したりとそれがその時代の日常であったように感じた。「日本」が自分たちと距離の遠い存在であったら、また表現の仕方は変わっていたと思う。日本が自分たちの日常の一部になっているからこそこのような表象のされ方になっているのだろう。また、ストーリーに目を向けて見ても、今回対象にした中で、劇映画12本のうち日本との関連性がある作品は『まごころを両手に』だけであった。『この街に心揺れて』は主人公の設定として日本が少し関係しているが、ほとんどの映画のストーリーには日本が関係ないにもかかわらず、日本の漫画や音楽、日本語が登場した。映画作品には、その国や地域に住む人々の日常が再現されているという考えのもとでこの結果を考察すると、台湾の中で日本は身近な存在にあり、日常的に何かしら日本の物や文化に触れていると考えられる。また、恋愛を描く映画、ジェンダーについて描く映画、コメディ映画など多種多様で、幅広く登場した。全体的に、日本が登場するシーンにはコメディ要素も多かった。これらから、日本というものがあまり意識されず、台湾との距離がとても近いことがわかった。その中でも『振り向いたらそこに』の映画で、日本人が監督をして、さらに作中で日本の要素を多く盛り込んでいることには、監督が敢えて日本を多く取り入れて、台湾の人々に見せようという意思が伝わった。このようにして、台湾映画の中には、日常に溶け込む日本が多く登場し、これは実際の台湾の中にも存在していることであると言えるだろう。

¹⁵ 曾文莉（2017）「2008-2015年の台湾映画における日本の表象」

台湾は 1895 年から 50 年間日本の統治下にあり、その時期に日本から様々なものが、1945 年に統治が終わり台湾へと戻ってもなお、日本時代の記憶は今でも台湾に残っている。その記憶が映画という物の中に見える形で残ることで、後世にも残っていくだろう。それが映画作品を通して見ることができた。そして、台湾に残る日本の文化や記憶が、現代の台湾の人々の親日感情に影響しているのだと考える。何かを好きになったり、嫌いになったりするには、何かしらの理由があるが、そのような理由あつての感情ではなく、無意識的に日本に親しみを感じるという社会に伝わる集合的記憶である。日本のものであることを意識する前から触れていることが自然と親日感情に影響しているのだろう。そこから日本を好きになる過程に、漫画や観光地などに興味が向いていくのだと考える。

最後になるが、現在の台湾の人々の日本に対する関心が強いことがわかる事例がある。劇場版『鬼滅の刃 無限列車編』が、台湾におけるアニメ映画として歴代 1 位の興行収入を記録した。¹⁶というニュースだ。日本への親日感情をベースに、日本に対して関心が今でも高まっているようだ。こうした積み重ねで、今後の日台の関係もより良い方向に進んでいくことを期待しつつ、筆者自身も、今後も映画を始め様々な方面で台湾に触れる機会を積極的に作っていきたい。

¹⁶ Yahoo!ニュース (2020 年 12 月 4 日) 「『鬼滅の刃』台湾で人気の理由を現地で聞く「これまでの漫画とは異なる見応えある新作」」一部引用

参考文献

論文

- ・赤松美和子(2017)「1960年代の台湾映画における日本表象」(大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要 第18巻 2017年3月)
- ・曾文莉(2017)「2008年－2015年の台湾映画における日本の表象」(大学院研究年報 文学研究科編 第46巻 2017年2月)
- ・赤松美和子(2019)「台湾学園映画が回顧する1990年代と日本大衆文化」(大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要 第20巻 2019年3月)
- ・小野純子(2016)「台湾映画『KANO』の語り」(人間文化研究 第25巻 2016年1月)
- ・星野幸代(2010)「台湾映画『海角七合』における日本：「野ばら」をめぐって」(言語文化研究叢書 第9巻 2010年3月)
- ・原口直希(2020)「台湾人若年層が抱く日本に対する「親しみ」の変容：日本のポップカルチャー受容を手掛かりに」(一橋研究 第44巻 2020年1月)

書籍

- ・周婉窈(2013)『増補版 図説 台湾の歴史』平凡社
- ・片倉圭史(2015)『古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年 1895-1945』祥伝社

ウェブサイト

- ・公益財団法人 日本台湾交流協会「2018年度 対日世論調査」
<https://www.koryu.or.jp/business/poll/> (2020年12月26日閲覧)
- ・シネ・ヌーヴォ X 「【台湾巨匠傑作選】〈台北発 メトロシリーズ〉」
<http://www.cinenouveau.com/sakuhin/taipeimetro/taipeimetro.html> (2020年12月28日閲覧)
- ・Yahoo!ニュース (2020年12月4日) 「『鬼滅の刃』台湾で人気の理由を現地で聞く「これまでの漫画とは異なる見応えある新作」」
<https://news.yahoo.co.jp/articles/68099c083388f75ef19cf82bf5cb461f1bf3cee2> (2020年12月31日閲覧)